

《博士論文要旨および審査報告》

奥田真結子 「新たなピーテル＝ブリューゲル像
の構築に向けて
—「社会的周縁」を見る眼と「民衆文化」
の擁護者として—

——学位請求論文——

I 論文要旨

奥田真結子

本研究は、16世紀ネーデルラントの画家であるピーテル＝ブリューゲル（以下ブリューゲル）の絵画作品を、民衆文化論を用いて歴史学の方法論で分析するものである。これまで、ブリューゲルの作品の多くは美術史のなかでしか扱われてこなかった。しかし、本論文ではアナール学派やプロニスワフ＝ゲレメクの仕事に学びながら、ブリューゲルの作品を芸術作品としてではなく、歴史の史資料として扱うことを新たな分析視覚としている。歴史上のブリューゲルの実像とその歴史学的な位置を明らかにし、ブリューゲルが16世紀には抑え込まれつつあった「民衆文化」を擁護する立場をとった人物であったと捉え直す実証研究を行うものである。

本研究は5章から成る。第1章では、ブリューゲルの生涯と、彼に関する一次史料について述べる。ブリューゲルの詳細な記録については1604年に出版されたカレル＝ファン＝マンデルの『画家伝』が最古のものとなる。そのため、研究者はマンデルの『画家伝』の史料を用いることが必須であるが、今日ではその史料批判を行いながら慎重に分析がなされている。さらに、これまでの美術史家によるブリューゲルの作品解釈論争、すなわち先行研究について述べる。従来の研究は、美術史家によるブリューゲルの農民解釈論争が中心であった。ブリューゲルの「農民観」について、それが愛着、共感といった肯定的なものであったか、粗野、愚鈍という否定的なものであったかという点について意見がわかっていた。

本研究は、上記のような視点に制約されることなく、ブリューゲルの絵画作品を、従来美術史家が行ってきた図像解釈の枠を超えて、歴史学の視点で捉え直す

うとするものである。したがって、ブリューゲルの作品を一次史料とし、分析を試みることになる。

第2章では、図像史料を読むうえでの方法論を説明する。本論文でブリューゲルの図像史料を分析する際、その方法論を明確にしておくことが重要である。なぜならば、美術史の方法論ではとらえきれなかったブリューゲル像を、歴史学の方法論を用いてより深く理解することを目的としているためである。しかしながら、当然これまでの美術史の方法論の成果を顧みないわけにはいかないので、美術史の方法論についても重要な点を述べていく。その後、歴史学の方法論であるアナル学派の仕事を取りあげ、彼らの仕事の本論文とどのような点で結びつかを説明する。とりわけ、ピーター＝パークの「エリート文化」と「民衆文化」の裂け目の拡大という、中世から近世にかけての人びとの心性の変化に着目し、そのような「中期的持続」の歴史的变化においてブリューゲルの作品がどのように評価できるかという問題意識を明確にする。さらに、彼らの論理は、ピエール＝ノラの「記憶の場」という概念を用いることによって、より深い理解を可能にする。ノラの「記憶の場」の定義を援用すれば、ゲレメクやパークのような論理構成を、図像史料においても、ある一定の有効性をもって読み取ることができると主張したい。

第3章および第4章で、ブリューゲルの作品分析を行う。

第3章ではおもにブリューゲルの作品に描かれた農民描写に着目する。ブリューゲルの絵画作品には祭り描写や結婚式、村の縁日といった農村風景が多く描かれる。この点について美術史家はブリューゲルの描く農民の牧歌性や、ブリューゲルの農民に対する愛着といったように、ブリューゲルと農民を別の世界の住人として、ブリューゲルが農民を外側から単なる好奇心で描いたように評価してきた。しかし、本論文は、ブリューゲルは農民世界における祭りや縁日の重要性を理解し、彼らの身振り言語を絵画作品に記憶化したといえるのではないかという仮説を立てる。以上の仮説を前提とし、本論文はノラの枠組を援用しながら、画家の描く絵画作品それ自体が「記憶の場」となり、①描かれた人びとが取り結ぶ「社会的結合関係」(水平的関係)、②描かれた人びととブリューゲルとが取り結ぶ「社会的結合関係」(連带的関係)、以上2種類の目に見えない絆の存在が確認できるということを証明する。

第4章では、ブリューゲル作品に見られる盲人や物乞いといった、当時のいわ

ゆる「社会的周縁」と呼ばれる被差別民に着目する。第4章ではおもに、グレメクの実証的な仕事をもとに分析を行う。グレメクの仕事は、本論文とはその対象とする時代に多少のズレはあるものの、15世紀から19世紀にかけてヨーロッパで進行した都市と農村の分離、都市の知識人の認識世界と農村住民の世界との分離、あるいは中心部と周辺部の分離と格差構造の発生について述べている。ブリューゲルの生きた16世紀は「エリート文化」と「民衆文化」が離反を見せ始め、「憐みから縛り首」へと社会が変容する過渡期であった。そのような社会背景を念頭に置き、ブリューゲルの「社会的周縁」のものたちが描かれた図像を再検討し、美術史家の認識の枠組では捉えきれなかったブリューゲルの「社会的周縁」の人のびとへの視座を分析する。

第5章では、ブリューゲルの絵画作品と他の画家の作品を比較し、ブリューゲルが描いた農民描写が、「農民風俗画」という表面的な部分においてのみ継承され、ブリューゲルの作品に内包された「民衆文化」擁護の視座が薄れていく過程を辿る。「周縁者を見る画家の視座」についての画家たちの態度の変化についても同様な視点から説明する。

以上、各章の議論を受け、「おわりに」ではこれまでの研究課題をまとめ、ブリューゲルという人物が「民衆文化」を擁護した画家であり、彼の作品は文字史料には残らない人々の等身大の「記憶の場」たり得ることを指摘する。そうして、これまでのブリューゲル解釈では見えてこなかった新しいブリューゲル像を構築し、「中期的持続」のなかでブリューゲルを捉えなおすという新しい試みを行う。

II 審査報告

- | | |
|---------------|----------|
| (主査) 専修大学文学部 | 教授 近江 吉明 |
| (副査) 専修大学文学部 | 准教授 島津 京 |
| (副査) 武蔵大学人文学部 | 教授 踊 共二 |

本学位請求論文は、16世紀ネーデルラントの画家であるピーテル＝ブリューゲル

ル（以下、ブリューゲルと略）の各作品を、美術史の視点からではなく歴史学の土俵上で分析し、それらの新解釈から新たなブリューゲルの実像を構築しようとしたものである。

ブリューゲルの作品を単なる芸術作品としてではなく歴史分析の一次史料と位置づけるにあたって、本研究はピエール＝ノラらの「記憶の場」論が提起する史料論に基づき、絵画史料の持つ「身振り言語」「感覚言語」に注目し、また、方法論として、アナール学派やピーター＝パークらの「民衆文化論」とプロニスラフ＝ゲレメクラが注目する「社会的周縁論」の二大分析視角を設定し分析を深めている。その上で、本研究は、16世紀ネーデルラント世界の歴史的背景を全体史的に掌握しながら、そうした同時代的状況の中でブリューゲルが意識的にかつ無意識的に表現した「記憶」の多面的な抽出により彼の等身大の人物像を浮き彫りにしている。

審査委員三名は、本学位請求論文を問題関心・研究の先進性、論文構成上の説得性、研究の到達点、史料・文献収集の広さと実証性、将来展望の観点から審査した。また、公開の口述試験において、直接、請求者本人より上記の審査観点についての判断材料を得た。

1、問題関心と本研究の先進性について

本研究は、ブリューゲル絵画作品を、これまで主に美術史家によって行なわれてきた図像解釈の枠を超えて、歴史研究の一次史料として捉え直そうとする新たな分析視角の導入によってブリューゲルの「記憶」の核心に迫ることを狙っている。それらの実証的分析を通して、美術史家の数だけ「ブリューゲル像」が存在する状況に本研究は終止符を打とうとしている。とりわけ、「農民画家ブリューゲル」の評価に象徴的に見られる、単に「民衆の文化」に共感を持つといったブリューゲル解釈の持つ限界を克服しようとしているところに、本研究の最大の先進性がある。この問題性は、美術史家一般に共通する、同時代人の認識パターンの再構成という方法論の欠如と、16世紀ネーデルラント社会の全体史的認識の不十分さにあるとしている。以下、本研究の先進性を挙げることにする。

まず、最初に強調すべきは、「民衆文化論」の分析視角の導入によって16世紀ネーデルラントが「エリート（政治）文化」と「民衆文化」の乖離する段階にあったことを基本的座標軸にしている点である。その設定された座標軸に、ブリュー

ゲルの「図像史料」から抽出された多様な「社会的結合関係」データを落とし込むことによってブリューゲル絵画作品のそれぞれの狙いが浮かび上がるとしている。第3章の《農民の婚礼》などの作品分析では、農民世界における「祭り」「結婚式」「緑日」などの描写を、「身振り言語」に着目しながら類型化し、農民たちの「暴力行為」、「野蛮さ」、「飲酒」、「踊り」などの振る舞いの中の「社会的結合関係」が、領主や教会の「エリート」層も含めた異なる社会層との交流・連帯意識を強調して記憶化しているとの新解釈を提示している。つまり、ブリューゲルは、16世紀ネーデルラント社会が抑え込み始めた「民衆文化」を失ってはならない重要なそれとして作品化したのだとしている。この脈絡で《野外での農民の婚礼の踊り》と《農民の踊り》の二つの史料を読み込めば、「祭りに後から付与された宗教的意義よりも、彼らがつ本来の祭りの文化を称賛し、保護しようとしている」との解釈も説得的である。これらの新解釈は《謝肉祭と四旬節の闘い》の史料批判部分でより明確に証明される。この作品は1559年に制作されたものであるが、当時は、1540年に皇帝カール5世が「カールの特赦」において、ヘントにおける都市空間で展開されるあらゆる集団的示威行為を統御していて、その中には、四旬節の第4日曜日に行なわれるギルド市民軍のパレードや織布工の聖母行列なども含まれていた状況の中での作品であった。そのような政治的状況のなかでこの史料を再分析すれば、「民衆文化」が「エリート文化」に否定され、圧迫されることに対する祭りの形を取った「蜂起」の側面が浮かび上がってくるという。すなわち、「ブリューゲルは農民の所作を通して祭りを肯定的に描き、それを通して事実上、その社会的機能を描くとともに、これらが文化的装置の役割を果たすものとして」、つまり、軽視してはならないものとして記憶化したのだと結論付けた点である。

次いで注目すべきは、ブリューゲル作品に多数描かれた「物乞い」「盲人」「放浪者」「ハンセン病患者」などの「社会的周縁」の人々の解釈に示された「社会的周縁論」に立脚した分析視角である。これについても美術史家に見られる「外在的な価値観」に基づくステレオタイプ化したブリューゲル作品解釈に対する痛烈な批判となっている。この分析視角においても16世紀ネーデルラント社会の全体史的動向の掌握が前提となっている。それは、プロニスラフ＝ゲレメクラが言うように、当時のネーデルラントが「憐れみから縛り首」へと変容する過渡期にあったとの確かな認識である。主に第4章の図像史料《盲人の寓話》《足なえた

ち》《ネーデルラントの諺》などの分析において、本研究は「社会的周縁」の人々を当時の社会にあっては排除してはならない存在として描き出しているところに注目している。ネーデルラントでは、1539年にブリュッセルで、1540年にはアントウェルペンで「良き貧民」と「悪しき貧民」の峻別を柱とした「救貧改革条令」が發布されている状況からすれば、ブリューゲルのこれらの作品は、「社会的周縁」の人々に対して排除の姿勢を強固にする社会の変容に対する警鐘と受け止められる。つまり、ブリューゲルは「社会的周縁」の人々をしっかりと「都市共同体」の、切り離してはならない存在として捉えていたとする点である。

2. 論文構成の説得性と研究目的の到達点について

本論文は、「問題の所在」と「おわりに」を別として5章から成り立っている。

第1章 ピーテル＝ブリューゲルについて

第2章 図像史料を読むうえでの方法論

第3章 農民、農村描写におけるブリューゲル像の再構築

第4章 「社会的周縁」を見る眼とブリューゲル

第5章 歴史学的見地から見たブリューゲル像の再評価—ブリューゲルの前後の時代における絵画作品の変容—

上記のような構成を持つ本論文は各章ごとに課題を設定し、それらを順次論証するという形式をとっている。

序論にあたる「問題の所在」では、本論文の目的および課題が提起される。図像史料の解釈の難しさを前提に、歴史学の「記憶の場」が展開する、文字史料と同等の一次史料にブリューゲル絵画作品を図像史料として昇格させ、しかし、絵画史の手法からではなくフランスアナール派などの提起する「民衆文化論」や「社会的周縁論」の分析視角からそれらを読み直すことが明示される。

第1章では、まず、ブリューゲルの生涯と作品群の時系列的な整理とその概略的な位置付けがなされている。彼についての数少ない文字史料の中で、1604年に出版されたマンデルの『画家伝』に注目し、その慎重な史料批判を通して現状で確認される彼の足跡を追いかけている。次いで、本研究が主に批判の対象としている美術史家の重厚なブリューゲル作品解釈論争の研究史的整理がなされ、成果と課題を明確にしている。その中で最大の問題点は、「ブリューゲルの農民解

積論争」であるという。ブリューゲルの「農民観」をめぐる論争は、それが農民への愛着、共感を伴う肯定的なものであったのか、それとも、それを粗野、愚鈍なものとする否定的姿勢であったのかで大きな相違を示しているが、本研究ではそれをアウフヘーベンするのだということが表明される。そして、そのためには16世紀のネーデルラント世界の全体史的掌握が大前提となるのだとして、この時期の構造史的把握のための、政治史、経済史、都市史、宗教史、民衆史などの先行研究の確認と、それらが捉えたネーデルラント全体史像が一種の座標軸として提示されている。

第2章では、「図像史料」を読み込むための方法論を明らかにしている。まず、美術史の方法論として注目すべきものが検討され、それらの中でも、同時代の視点の再構成が必要とされていたとして、当時の人々の文化や社会に見られる慣習や無意識下の「クセ」への着目、さらには、ヴァクサンドールが示した特定の社会集団に共通する認識の枠組みの抽出が求められていたことを確認している。美術史家による「社会史」への接近の動きが正確に捉えられている。その上で、本研究の核となる方法論の全容が確認される。その一つは、主にアナール学派の提起する「民衆文化論」や「社会的結合関係論」である。とりわけ、ピーター＝パークの主張する「エリート文化」の「民衆文化」からの離脱と、「民衆文化」否定の流れについての分析視角である。二つ目は、「社会的周縁論」に基づく分析視角の適用である。ゲレメクの「憐れみから縛り首」への変化を16世紀のネーデルラント社会とブリューゲルの「図像史料」の中に見出すという方法である。最後に、ピエール＝ノラらの「記憶の場」論の再度の検討により、一次史料としての「図像史料」上に浮かび上がる「身振り言語」や「感覚言語」を通して、上記の二つの分析視角のいくつかのポイントを定点観測風に設定している。

第3章及び第4章では、「図像史料」としてのブリューゲル作品の実証分析が行なわれる。

第3章では、ブリューゲルの農民描写が分析される。対象となる作品は農民の祭り、結婚式、縁日が主題となるもので、その分析では従来の「農民の牧歌性」や「農民に対する愛着」といった農民とは別の世界の住民としてのブリューゲルの眼差しではなく、農民世界の「民衆文化」の核心部分に深く入り込みその重要性を取り込んだ彼の姿勢が読み取れるとした。こうして、彼は農民たちの行動や所作に見られる身振り言語を絵画作品に記憶化したと結論付ける。その局面を作

品上の「描かれた人々が取り結ぶ「社会的結合関係」(水平的関係)」と「描かれた人々とブリューゲルとが取り結ぶ「社会的結合関係」(連帯的關係)」という二つの目に見えない絆として抽出している。

第4章では、図像史料にあらわれる「物乞い」「盲人」「放浪者」「ハンセン病患者」といった、「被差別民」「賤民」とも認識される「社会的周縁」の人々がどのように「記憶」されたかが分析される。対象となった史料は、《盲人の寓話》《足なえたち》《謝肉祭と四句節の闘い》《ネーデルラントの諺》《聖マルティンのワイン祭り》《愛徳》である。これらの史料批判においては、同一のテーマを狙った他の作品と比較しながら、ブリューゲルがそれぞれの作品においてどこを強調し、なにを訴えているのかを冷静に見極めている。そうした多角的な史料分析の結果、ブリューゲルは、「社会的周縁」の人々を絶対的他人たらしめるのではなく、むしろ身近な存在として、自らと完全に切り離すことのできない存在として捉えていると強調している。換言すれば、ブリューゲルは、彼らの存在を詳細に「記憶」化することによって、彼らの生きざまをしっかりと認識し、その彼らを含めずにネーデルラント社会は成り立たないということを訴えているのだと読み取っている。

第5章では、第3・4章で分析されたブリューゲルの「民衆文化」擁護と「社会的周縁」の人々への共感的眼差しを、他の画家たちの作品との比較によってクローズアップするということをしている。その作業を通して、本章では、ブリューゲルの農民描写が、「農民風俗画」という表層的な部分のみ継承され、彼の作品に内包された肝心の「民衆文化」擁護や「社会的周縁」の人々の存在を重視する姿勢が薄れていく過程を克明にあぶり出している。逆に言えば、風景画の普及の流れの中の、新たな枠組みとしての、牧歌的風景における「農民」や「社会的周縁」の人々の消滅という現象から、ブリューゲルのそれらを擁護する姿勢がより明確に立ち上がってくるという。18・19世紀に注目される「民衆文化」や「社会的周縁」の人々への関心に至っては、「エキゾチック」なもの、あるいは「崇拜」の対象となってしまうということも、16世紀を生き抜き、絵画作品に多くの「記憶」を蘇らせたブリューゲルの特異性を引き立たせているとしている。

終章としての「おわりに」では、各章の成果を整理し、それらを全体的に組み直し本研究のまとめとしている。すなわち、ブリューゲルは単なる「民衆文化」の「仲介者」ととどまらず、むしろ、失われつつある、あるいは排除されつつあ

る「民衆文化」を擁護するという、はっきりした意思を持っていくつかの作品を制作したと結論付けている。

このように、本研究は第3・4章においてブリューゲルの一次史料としての図像史料の史料批判に基づいて、「民衆文化論」と「社会的周縁論」の分析視角から迫り、16世紀ネーデルラント社会の変遷の中でのブリューゲル像を浮き彫りにしている。以上の点から、本研究で意図した研究目的は十分にクリアできたと言える。

3. 史料・文献収集の広さと実証性について

本研究の特色の一つは、問題意識の先進性とその実証の深さにあるが、それらは豊富な図像史料による論証と、関連する先行研究文献の詳細な批判とそれらの成果の正確な活用によって裏付けられている。それは各頁の注表記や巻末の「史料・文献一覧」に如実に表れている。

まずは、ブリューゲルの絵画作品を歴史研究上の一次史料（図像史料）にするための史料論を行ない、「記憶の場」についての丁寧な先行研究の検討を行なっている。その上で、絵画史研究の重厚な研究史の整理を行ない、それらの作業から明らかになった「成果」を適宜取り入れながら、また、同時代の周辺画家の「図像史料」との比較分析を行なっている。

次いで、本研究が依拠した二大研究視角である「民衆文化論」「社会的周縁論」の先行研究の読み込みも的確に実施されている。とりわけ、ヴィッテンベルク文書館所蔵の『救貧政策』史料と刊行史料の『放浪の書』の活用はネーデルラント社会の「社会的周縁」の人々を比較史的に掌握する上で重要な補強史料となっている。

さらに、その他の関連する二次文献としての先行研究文献は単行本・論文ともにほぼ完全に近い形で確認されている。また、それらの読み込み、批判が丁寧になされていて、それぞれの成果と課題が明示されている。

以上の点から、史料・文献収集とそれらの活用が十分に行なわれていると判断できる。

4. 研究の展望

本研究は、以上のような成果を持ちながらもいくつかの課題のあったことが指

摘される。まずは、ブリューゲルと同時代の他の画家たちの作品研究の必要性である。それもヒエロニムス＝コックのような彼に影響を及ぼした画家たちだけでなく、彼の作品とは対極にある作品群との比較が重要である。

次いで、ブリューゲル研究に関するオランダやベルギー各地方の歴史家や美術史家の動向を掌握する必要性である。そこに見られる「地方史研究者」や「美術史研究者」との交流を深めることが求められる。同時に、日本の美術史家との研究交流も「民衆文化論」や「社会的周縁論」の分析視角の有効性を高めるためにも重視すべきである。

さらに、16世紀ネーデルラント社会の特定地域の設定（例えば、アントゥルペン）によって、その地域の全体史的研究を文字史料や統計資料を通して行ない、その土俵の中で「民衆文化論」や「社会的周縁論」の分析視角からブリューゲルの「図像史料」を捉え直すことも今後の一つの研究の在り方として注目すべきであろう。

最後に、16世紀ネーデルラント世界掌握に関しての研究の深化が求められる。とりわけ、厄介なテーマではあるが、宗教対立問題、ハプスブルク帝国支配の実態、都市史研究が追跡する救貧政策、傭兵団や野武士団の影響、重商主義段階におけるネーデルラント諸都市の経済的動向、農村地域の領主制の実態などの更なる掌握はどうしても必要な研究である。

5. 口頭試問について

近江、島津、踊の三委員によって行なわれた口頭試問では、本学位請求論文提出者は、三委員からの統括的質問と個別的質問に対し、適切かつ明快に答えられ、これに十分に対応されたと判断した。

Ⅲ 学位授与要記

- 一、氏 名 奥田 真結子
- 二、学位の種類 博士（歴史学）

- 三, 学位記番号 博歴甲第二十六号
- 四, 学位授与の条件 学位規則第四条第一項該当
- 五, 学位授与年月日 平成二十九年九月二十日
- 六, 学位論文題目 新たなピーテル＝ブリューゲル像の構築に向けて
—「社会的周縁」を見る眼と「民衆文化」の擁護者として—
- 七, 審査委員 主査 専修大学文学部 教授 近江 吉明
副査 専修大学文学部 准教授 島津 京
副査 武蔵大学人文学部 教授 踊 共二